



5

10

15





喇叭吹奏歌

第一號

**開** 天皇及皇太后皇后皇太子太子妃皇族ニ對シ敬禮ヲ表スルルキニ用ユ

○ 君か代

君か代は千世ちよに入千代いせんにいさゞれ石いしのいははとなりて  
こけのむすまで

第二號

將官及相當官并將官ノ職ヲ奉スル大佐ニ對シ敬禮ヲ表スルルキニ用ユ

○ 海ゆかは

海うみゆかはみつくははなまゆかはくさむすかはね  
かは君のへこをむしなのとにはしなし

第三號

軍隊相達あいくさア時ときニ用ユ

○ 皇御

すめら御み士しはいかなる事ことをか勉つとむべき

唯身にもてる誠心を

第四號

わが大君に盡すまで

○國の鎮め

國の鎮のみやしろと  
けふの祭りの賑ひを  
治る御代を守りませ

いつさまつろふ神靈  
天かけりても御覽せ

第五號

一般葬禮ノ時ニ用ユ

○命をすて、

命をすて、大丈夫が  
在べき限り語りつき  
絶せむつきじ万世も

たてし功績は天地の  
いひつきさ行む後世に

第二百十五號

分列式ノ時ニ用ユ

○扶桑歌

わが天皇の治めしる  
八百万世も動かぬぞ  
治玉へはとことばはに  
四方に輝やく稜威は  
斯るめでたき我國の  
天皇が恵に酬はんぞ  
つくせよや人力を

わか日の本は万世も  
神の御世より神惟ら  
動かぬ御代ぞ變ぬぞ  
月日の如く照すなり  
やよ國たみよ朝夕に  
心を合せひたふるに  
あはせて盡せ人々よ

第二百十八號

登坂ノ時ニ用ユ

○あらしいはね

あらし岩根をふみくさみ  
武士の身の常ぞかし

峻しき坂を越ゆくも  
習へば慣る君がため

射向ふ敵はむけ卒つ  
御心休めまゐらせん

第二百十九号

○大君の

大君の稜威かしこし  
不服ぬ國をことむけ  
平らけく歸る思ひは  
御軍の功績たふとし

第二百二十号

○ふきなす笛

ふきなす笛の其音も  
もの、哀をしり顔に

歸りてはやく我君の  
急げやいそげ御軍よ

歸營行進ノ時ニ用ユ

御軍のいさを尊とし  
千早振人をはやし  
大君のみいづ畏こし  
其稜威はや其功はや

葬禮ノ途上ニ用ユ  
新撰軍持抄云

捧る旗のそのいろも  
けふはものこそ哀しけれ

千百萬のてきぐんも  
思へる我等が袖迄も

取て來ぬべき丈夫と  
涙の雨にぬれにけり

左の諸篇は吹奏歌の号中に非すといへども亦鼓勇の  
一助にもと今こゝよ合せしるしぬ

軍歌

○第一

新撰軍持抄云

來れや來れいざ來れ  
寄來る敵は多くとも  
死すとも退くと勿れ

御國を守れや諸共に  
恐る、勿れ恐る、な  
御國の爲なり君の爲

○第二

進めや進めいざ進め  
劍は林を爲すとて  
死すとも退くと勿れ

彈は霞と飛び來るも  
猶豫となく進み行け  
御國の爲なり君の爲

第三

勇めや勇め皆いさめ  
御國をまもる兵士の  
死すとも退くと勿れ

第四

勉めや勉め皆どもに  
汚せし者ぞと後世よ  
死すとも退くと勿れ

第五

思へよ懐へ能く懐へ  
我身の失ざる其中は  
死すとも退くと勿れ

第六

守れや守れ皆まもれ  
恐るゝものは父母の  
死すとも退くと勿れ

第七

恐るゝ勿れ恐るゝな  
國をは愛する兵士に  
死すとも退くと勿れ

第八

進めや進め皆すゝめ  
命を惜まむ進み行け  
死すとも退くと勿れ

劔も弾もなんのその  
身は鐵よりも猶堅し  
御國の爲なり君の爲

汚しとなき國の名を  
言れぬ様に覺悟して  
御國の爲なり君の爲

神より受たる此國は  
人手に決して渡さむと  
御國の爲なり君の爲

異國の奴隸と成るを  
墳墓の國をば能守れ  
御國の爲なり君の爲

民をは愛する我君と  
勝べき者は世よ非む  
御國の爲なり君の爲

腐し心のなきものは  
御國の旗をたて立て  
御國の爲なり君の爲

進めや進め皆すゝめ  
進めや進め皆すゝめ  
死すとも退く事勿れ

御國の旗をおし立て  
祖先の國を守りつゝ  
御國の爲なり君の爲

○援刀隊の歌

第一

新撰軍書外山正一

われは官軍わが敵は  
敵の大將たるものは  
是れに従がふ兵士は  
鬼神に耻ぬ勇あるも  
起せしものは昔より  
てきの亡ぶる夫迄は

天地容れざる朝敵ぞ  
古今ふそらの英雄で  
ともには慄悍決死の士  
天のゆるさぬ反逆を  
榮しためし非ざるぞ  
進めや進めもろ共よ

玉散る劔抜き連れて

死る覺悟で進むべし

第二

皇國のふうと武士か  
維新以來すたれたる  
亦世は出る身の譽れ  
刃の下は死ぬべきま  
死可き時は今なるぞ  
敵の亡ふる夫れ迄は  
玉散る劔抜き連れて

其の身をまもる魂の  
日本刀のいまさら  
てきさも味方も諸共に  
日本靈魂あるものは  
人又後れて耻かくな  
進めやすゝめ諸共に  
死る覺悟で進むべし

第三

前をのぞめば劔なり  
劔の山にのぼるのは

右も左もみなつるぎ  
未來の事と聞つるに



此世に於て面の當り  
我身のなせる罪業を  
賊を征伐するが爲め  
敵の亡ぶる夫れ迄は  
玉散る劍抜き連れて

第四

つるぎの光り閃くは  
四方は打出す砲聲は  
てさの刃に伏す者や  
絶て果なく死る身の  
其血は流て川をなす  
敵の亡ぶる夫れ迄は

劍の山よのぼるのも  
滅す爲にあらざして  
劍のやまも何のその  
進めやすめ諸共よ  
死る覺悟で進むべし

くも間に見ゆる電か  
てんよとゞろく雷か  
丸に碎けて魂の緒の  
屍は積みて山をなし  
死地に入のも君の爲  
進めやすめ諸共よ

玉散る劍ぬき連れて

第五

彈丸雨飛の間に  
進むわが身は野嵐に  
果なき最後を遂る其  
死て甲斐有者なれば  
我とれもはん人達は  
敵の亡ぶる夫れ迄は  
玉散る劍ぬき連れて

死る覺悟で進むべし

二つ無身を惜まむに  
吹かれて消る白露の  
忠義の爲に死る身の  
死るも更に恨みなし  
一歩も後へ引なかれ  
進めやすめ諸共よ  
死る覺悟で進む可し

第六

我今此に死なん身は  
捨つべき者は命なり

君の爲なり國のため  
たとひ屍は朽るとも

忠義の爲に死する身の  
永く傳へて残るらん  
義も無犬と言ふはな  
敵の亡ふる夫れ迄は  
玉散る劔ぬき連れて

○行軍歌

我が日の本の國體は  
神の御國と稱へさて  
遠き戎夷が國までも  
射すや草葉の露程り  
類もすくなき緒環の  
守るは誰の職務ぞや

新撰軍歌

名は芳はしく後世に  
武士と生れた甲斐も無  
身怯な者と誇られな  
進めやすめ諸共  
死る覺悟で進むべし  
故き神代の頃より  
五百海阪へだてたる  
光りかゞやく旭子の  
侮り受したためしだも  
盡さぬ皇帝が功績を  
誠ある身は甘美も

進軍歌

新撰軍歌

五つの訓戒銘肝して  
多聚かる人の其中に  
厚さ仁惠は駿河なる  
伊勢の海すら尙淺し  
寇なす戎夷有るせば  
討ち夷らげて大君の  
彈丸は罌と空に飛ひ  
いかづち擬ふ砲聲も  
わが魂の緒も打絶ん  
屍は野邊も晒すとも

東の関もぬするなよ  
醜み御楯と援擢れて  
富士の高峯も尙低く  
其天皇も若しやまた  
關躰事はなきものを  
御心慰たてまつれ人  
つるぎは野邊の電か  
吹き來るかせも唄く  
今期の時ぞ勇壯し  
躰躰とよなきものを  
名は后代に觀郁しく

さくらと匂ふ九段坂  
祭り納めよし諸靈は  
寇なす戎夷盡るまで  
などか厭はん敷島の  
堅固に堅硬き金剛の  
人みななべて羨慕す  
故郷人に品格たかく

○軍旗の歌 第一

二千五百年以來  
その國まもる軍人よ  
わが大君の御記章ぞ  
如何成敵をも打攘へ

地球のうへに輝かせ  
ちうと勇とに此旗を

第二

昇る朝日ともろ共に  
汝を援けたまふへし  
此八洲國の内ならて  
神功皇后豊太閤  
忠と勇とに此の旗を

第三

四方うみなる日本國  
すゑ頼母しき金城は  
翼たけしき鷲とても

空にそびゆる靖國の  
是大丈夫の龜鑑そや  
假令や火の中水の底  
倭たましひ飽までも  
石より光かゞやくは  
青白なせる桐の記章  
錦繡を飾る心氣よさ

ひかり輝く日本國  
なんぢの仰く大旗は  
君の詔をかしこみて  
忠と勇とにこの旗を

如何成寇をも打攘へ  
地球のうへに輝かせ

代々の皇帝の神々は  
汝の勳功を立る場は  
外國々に在りとしれ  
昔の功績れもふべし  
地球のうへに輝かせ

砲臺よりも艦よりも  
汝等ちう義の軍人ぞ  
爪牙鋭き獅子とても

我皇國よあだを爲す  
いかづち爲る大砲と  
如何成敵をも打攘へ  
地球のうへに輝かせ

第四

みくにの靈と軍人が  
むかしは弓矢やり刀  
なんぢの帯る銃剣は  
揮ふべき時揮ひつゝ  
此大旗を推し立てゝ

第五

わが大君の御記章と

益々光りかゞやさて  
われ々陸海軍人の  
いかに唱へて説びて  
いかに戦争すみし時  
益々光りかゞやさて  
御稜威は世界に響くらん

○扶桑歌

すめら尊の統御しる  
一代の如く神ながら  
猛く雄々しく平げく  
其大御稜威あさ宵に  
仕へまつらふ人民は

新撰軍歌

悪者共の在るならば  
電光激くつるぎもて  
ちうと勇とに此旗を

用ゆる利器は何物ぞ  
いまは銃砲軍かんよ  
倭たましひある人の  
驚をも獅をも打攘へ  
如何成敵をも打攘へ  
國のひかりと建る旗

あだを平げ民を撫で  
いさをし譽て諸人が  
榮譽は限なかるべし  
くこの光りは此旗と  
萬世不朽のてい國の  
御稜威は世界に響くらん

福和

我日本は千五百代も  
治め給へば大御稜威  
豊に安く在りとかや  
綾こかしこみ安國と  
彌増々まごゝろの

ひとつ心に集めへて  
然れこそ世よ我國を

○復古の歌

王政復古の其かみを  
三とせの冬の十二月  
都の空にたちかへる  
世はかりぞもと亂れつ、  
鞍馬にひびく時の聲  
星のくらゐも三臺の  
曉つさ暗き鳥羽伏見  
錦の御旗ひるがへし  
勇氣弥増ますらをが

我日本をまもりける  
浦安國とたへたり

れもへば凄し慶應の  
九日の日を始めよて  
春の光もぬばたまの  
あやめもわかぬすみ染の  
鎧の袖にかゝやくや  
影薄れ行さしぐしの  
大内山のやまかせよ  
大將軍のいでましよ  
軍よはゐも雷づちと

轟さわたる修羅の道

斬つ斬れつ阿毘叫喚

ちしほよ染る楓葉の  
休れ重なる屍ばねの  
踏しだぎゆく戦場の  
翳す劍のつかの間も  
道の果こそ憐れなれ  
炎火さかまく淀の城  
煙の末のかげろふも  
朗き春にうちまどる  
かたりつ、酌む盃に  
此うたげこそ樂し梟

赤き心をとるぐに  
敵か身方か彼は誰れ時  
習ひ常なき露の身か  
君をぬすれぬ武士の  
天地もうごく震動に  
掩る雲のたちまちに  
さねて治る君がよの  
昔し語りど過し世を  
老たる影もかつ見る

○カムフベル氏英國海軍の歌

○第一

イギリス國の海岸を  
一千年のそのあいだ  
戦争のみか嵐しをも  
敵を受とも撓みなく  
軍烈しくあらへあれ

○第二

立來る海の浪間より  
汝を援けたまふべし  
其甲板はてがらの場  
大子ルソンやフレッキーの  
軍烈しくあらばあれ

矢田町史記 二十

かたく守れる水兵は  
汝が建つる大はたは  
支へ得たれば此後も  
勇氣の限り飄がへせ  
嵐しも強く吹ば吹け

汝が祖先あらわれて  
けたし祖先の軍艦の  
大海はらは其はか場  
死よし所は人しのぶ  
嵐も強く吹かば吹け

第〇三

四方海成ブリタニヤ  
山と立くる波とても  
慣て我家に異ならむ  
船よりはなち轟かし  
軍烈しくあらばあれ

○第四

國の光りとたてし旗  
危難も都て解去りて  
其時汝しつわものゝ  
歌に唱ひて悦こびて  
烈しき軍すみしと時

砦でも城も用はなし  
千尋の底の淵とても  
雷づちなせる大砲を  
波を分つゝ進み行く  
嵐も強く吹かば吹け

ますく光り輝きて  
大平の日に戻るらん  
いさほし譽て諸人が  
安樂限りなかるらん  
つよき嵐のやみし時

○テニソン氏輕騎隊進撃の歌

○第一

一里半なり一里はん  
死地のりに乗入る六百騎  
士卒そつたる身の身を以て  
答こたへをなすも分ならむ  
死ぬるの外は非らん

○第二

右を望のぞめば大づつぞ  
とみに打出す砲聲ほうせいは  
響ひびきの如く凄まじき  
猛り立てぞ進むなる

外山正一  
新撰軍歌抄

ならびて進む一里半  
將しょうは掛かれの命くたす  
ぬけを糾たいそは分ならむ  
これ命これに従ひて  
死地のりに乗入る六百騎

前も左りもまた筒ぞ  
天に轟くいかづちの  
彈丸雨飛の間だもに  
死地しちこそ入れ鱈の口

勇で乗り入る六百騎

○第三

ぬけば玉たまちる刃やいばをバ  
さらくくと輝けり  
大砲方をなで切りに  
烟りの中又飛込みて  
太刀たちの早業見事なり  
遂ついに支さふる事ならむ  
むまの頭かしらぞたて直す  
残るは最と纒ゆづりかなり

○第四

右をのぞめば大筒ぞ

皆みなもろ共に振あげて  
激陣てきじん近く乗り掛けて  
最と目冷めさましさ働さぞ  
烈しく陣ぢんを破るなり  
敵の軍勢たぢくと  
むらくばつと群崩ぐんづれ  
以前に進みし六百騎

左りも後ろも大筒ぞ

とむに打出す砲聲は  
彈丸雨飛の其の中に  
死地より出て乘還す  
かへるは元の一里半  
残るは最と纒かなり

○第五

あ、勇まし武士ふの  
手柄は永く傳へなん  
とる年あまた重りて  
頭に霜をいただきて  
六百人のぞうけつが  
其ふる事を語ろふて

天よ轟くいかつちぞ  
縦横むじんに切靡く  
鱗の口より脱れ出で  
六百人のその其中で

よに香しき其はまれ  
今のおさなで生立て  
腰は梓さの弓となり  
孫ひこやしやで多時  
敵の陣ねと乗入れる  
未代までも名は朽じ

○楠正成櫻井驛よ於て正行へ遺訓の歌

建武のむかし正成は  
是は一歳都攻の有りし時  
之を汝じに譲るなり  
世は尊氏の世と成て  
鏡にかけて見る如し  
父の子成バ流石よも  
月はり月のかげ暗く  
打もらされし郎等を  
吉野の山の奥ふかく  
ながれも清き菊水の  
敵を千里よ退ぞけて

肌はたの守りを取り出し  
下し給ひし綸旨なり  
我兔に角よ成なら  
叡慮を惱し奉らんは  
さは去り乍ら正行よ  
忠義の道は兼て知る  
家名を汚すこと勿れ  
憐れみ扶助し家の  
月のかつらは漣みや  
旗を再びひるかへし  
叡慮をなくさめ奉れ



嗚呼あゝ 叡慮あいのりよ を安し奉れ

○小楠公を詠むるの歌

新撰軍歌抄

嗚呼正行よ正つらよ  
黒雲四方に塞がりて  
悪魔あくまは天下を横行し  
侮せまどり果て上とせむ  
絶間ゆゑのなき人馬の音  
芳野の山に花見んど  
君が御代こそ千代くと  
夫いづれの時にあるなるや  
嗚呼大きみの御爲に  
此世の塵ちりを拂はらはんと

公の逝去の此かたは  
月日も爲め光なく  
下を虚よたげ上をさへ  
吹き來る風は腥あまぐさく  
春は來れども花咲す  
訪來る人は絶てなく  
さへづる鳥の聲聞は  
なげかわしきの至りなり  
振ひ起りて汚れたる  
する人どて有ざるか

遠くあなたを見渡ば  
雲の上まで屹きつりつし  
見ゆる菊水の其旗は  
ちゝの賜たまひしこの刀  
賊ぞくの頭かぶらを斬きせむ爲  
國くにの仇あなり父のあだ  
攘はらへば來たる夏の蠅は  
熟うら思ひめぐらせば  
若もしも病やまひに冒おされて  
不忠不孝と誹そられむ  
死出のな残ごりに今一度  
君の御影おかげを伏し拜おひみ

金剛山は嶷ぎ峨おとして  
繁しげる林の木の間より  
實げんにこそ國の寶たからなり  
腹はらを切どの爲ならず  
惡にくむよくし彼の賊ぞく等  
斬きて捨すてに置おべきか  
頃ころは正平戊子ぼしのはる  
元來ぐんらいよはさ此からだ  
空むかしく失せし事あらば  
討死うちじするはこの時ぞ  
願ねがかなへて親面まのあたり  
生なまて歸れの詔みことのり

聞て切なる胸のうち  
 書きのこしたる梓弓  
 ちかひし者は百餘人  
 物とも爲す斬まくり  
 討死せしは繋ぎよく  
 都も遠さむらざとの  
 ちう臣孝子の鑑ぞと  
 天地と共に傳はらん  
 武士の磔たへつゝ  
 やまと心のくもり無  
 赤坂山にたてこもり

○詠史

哀れといふも愚なり  
 引てかへちぬ赤心を  
 雲霞の如き大ぐんを  
 さみの方をば枕して  
 いさましかり晁次第なり  
 女なはらべよ至まで  
 譽るその名は香しく  
 天地と共に傳はらん  
 其名かれせぬ楠木の  
 君よ仕へて國のため  
 あるは千早に吹下す

ねろしの風よかたぎらば  
 散行きにけり彼本の  
 又引かへし攻め來バ  
 心ろきわめて櫻井の  
 手に教つゝ、残しおき  
 うちしたたがへて湊川  
 謀りし事め泡となり  
 像てかくぞと空よ満  
 花とちりてし憐さを  
 暫時眠ろむ夢をさへ  
 心をつぎて君がため  
 家よ傳しみたらしの

堪りもあへせちりくど  
 いやつ岸に打よせて  
 今を限よ死なばやと  
 里よ香れる言の葉を  
 其身はやがて兵士を  
 底をふかみて赤心よ  
 さへて戦さの敗ると  
 やまと心は三吉野の  
 早くも仇の傳へ聞き  
 驚かなんとむら肝の  
 盡す心はたゆみなく  
 梓のゆみの無かたに

いるてふ事を記し置  
實に類ひなき丈夫の  
國を枕になしてけ  
傳へ聞くだも身も寒

○日本魂

日本魂ひそはなんぞ  
外國人のあなをりを  
これぞ日本の心なる  
日本魂ひそはなんぞ  
栖む人としても諸共  
是ぞ日本の心ろなる

吉野の山の香れるも  
親子腹から残らるも  
あかさ心を今も世も  
成る鼻かな憐れ丈夫

矢多部良吉

寄せ來る敵を打拂へ  
夢にも受る事はなし  
これぞ日本の心なる  
筑紫のへてや陸奥に  
偏へに盡す國の爲め  
是ぞ日本の心ろなる

やまと魂其はなんぞ  
如何なる事の有迎も  
これぞ日本の心なる  
やまと魂ひ其は何ぞ  
力のあらん限りには  
これぞ日本の心なる  
やまと魂ひ其は何ぞ  
國に無學の跡を絶ち  
これぞ日本の心なる  
やまと魂ひ其は何ぞ  
家の富るも貧しきも  
これぞ日本の心なる

割れハ亡び合へバ立  
心合して割れざらむ  
これぞ日本の心なる  
人々勉めれこたらず  
國を開きて利を興す  
これぞ日本の心なる  
學びの道を盛りまし  
智識を以て名を揚る  
これぞ日本の心なる  
尊とさきひとも卑人も  
相親しみて僻みなし  
これぞ日本の心なる

日本たましひ其は何ぞ  
道あるものと交るま  
これぞ日本の心なる  
やまと魂ひ其は何ぞ  
信を盡す其の爲めに  
これぞ日本の心なる  
日本たましひ其はなむぞ  
たゞしき道の刃よて  
これぞ日本の心なる  
日本たましひ其何ぞ  
慈悲の心を擴ひろめ  
これぞ日本の心なる

外國ひとを侮どらす  
彼と是との隔てなし  
これぞ日本の心なる  
ちう義心を堅くとり  
身バ棄ても動かじと  
これぞ日本の心なる  
弱を扶けて強を撃ち  
無理非道をば滅さむ  
これぞ日本の心なる  
幸なき者を憐れみて  
禽獸にまで及ばさむ  
これぞ日本の心なる

明治十九年十月十九日翻刻御届  
同 年十一月一日出版

定價三錢

東京府 河井源藏

神田區一橋ツ通間  
十一番地

兵庫縣平民 山川鶴吉

神戸區濱宇治ノ町  
六十七番屋敷

發賣所 神戸元町通り五丁目  
船井弘文堂